

**科学研究費助成事業 研究成果報告書**

平成 27 年 5 月 28 日現在

機関番号：14401

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2012～2014

課題番号：24730536

研究課題名(和文)学級の社会的目標構造が児童の学習動機づけおよび学校適応の促進に及ぼす効果

研究課題名(英文)The effect of classroom social goal structures on academic motivation and classroom adjustment

研究代表者

大谷 和夫(Ohtani, Kazuhiro)

大阪大学・人間科学研究科・助教

研究者番号：20609680

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,500,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、小学校の学級で強調される社会的目標が、児童の学級適応と学習動機づけに及ぼす影響について検討した。研究1では、小学校教諭15名を対象に、学級で強調される社会的目標を調べ、学級の社会的目標構造尺度を作成した。研究2では、小学生292名を対象に、尺度の妥当性の一部を検証した。研究3では、117学級に所属する小学生3609名を対象に、学級の社会的目標構造が学級適応および学習動機づけに関連するプロセスを、学級と生徒の2水準においてマルチレベルモデリングにより検討した。学級の社会的目標構造は、児童の人間関係を円滑にすることで、児童の社会面、学業面双方にポジティブな関連をすることが見出された。

研究成果の概要(英文)：This study examined that the relationships among classroom social goal structures and students' classroom adjustment and academic motivation. In study 1, what social goals were emphasized in elementary schools was investigated by the open-ended questionnaire distributed to 15 teachers. In study 2, the psychometric validity and the reliability of the scale were demonstrated by the questionnaire survey in which 289 elementary school students were participated. In study 3, the process that classroom social goal structures relate to classroom adjustment and academic motivation were investigated. Thirty-six-hundreds and six students from 117 classroom were participated the survey and the data was analysed by multilevel structural equation modeling. The study confirmed that classroom social goal structures promoted peer interaction and then associated to both social and academic adjustments.

研究分野：教育心理学

キーワード：学級の社会的目標 学習動機づけ 学級適応 児童

## 1. 研究開始当初の背景

児童の学習における動機づけを検討する際に、学級環境に焦点が当てられてきた。なかでも、学級の目標構造という概念に着目した研究が蓄積されている(Ames, 1992)。学級の目標構造とは教員が伝える目標に関するメッセージであり、学級レベルの達成目標である(Ames, 1992; Kaplan et al., 2002)。目標構造は、学級が個人の熟達を強調する「熟達目標構造」、学級が課題の遂行を強調する「遂行目標構造」に大別される(Ames & Archer, 1988)。これら目標構造のうち熟達目標構造は、一貫して熟達目標構造は児童の学業達成や動機づけにポジティブな影響を、遂行目標構造はネガティブな影響をもたらすと考えられてきた(Murayama & Elliot, 2009)。このように、学級環境の要因は、動機づけに重要な影響を及ぼすと考えられる。

### 学級における社会的環境の重要性

学級の目標構造は主に学業場面について概念化されたものであるが、日常の教育活動の中には、教師との信頼関係や仲間との交流など社会的な側面も存在する(Allodi, 2010)。学級の社会的な環境は、主に学級風土(social climate)研究の文脈で扱われてきた(Fraser, 1998)。Fraserを中心とした学級風土研究のグループは、学級の風土について多様な側面から捉えようとしている。例えば、Fraser(1998)は学級風土を測定する質問紙(What Happening In this Class: WHIC)を作成し、「生徒同士の結束」「教師のサポート」「クラスへの参加」「自律性」「課題志向性」「共同学習」「平等性」の7つの側面から学級風土を捉えている。これら学級風土の下位側面はそれぞれ、生徒の認知や動機づけ、さらに学業達成に影響を及ぼすことが見出されている(Fraser, Aldridge, & Adolphe, 2010; for review see, Allodi, 2010)。学級の社会的環境は、児童・生徒の学業達成や学校適応を考える上で重要な要因であると考えられる。

### 学級風土研究の問題点

一方、これら学級風土研究では、(a)社会的目標の次元が明確に概念化されていないこと、(b)が挙げられる。日常の教育活動の中では、特に社会的目標が強調される傾向にあると考えられ、それらの目標がどのように児童の学校生活の諸側面に関連するのかを明らかにすることには研究上ならびに教育実践上の意義があると考えられる。

また、社会的目標構造は、学級レベルの概念であるため、分析上は学級レベルで扱う必要がある。そこで、本研究では、学級の社会的な目標構造が児童の学習動機づけに間接的に関わるプロセスについて、マルチレベルモデルをあてはめ、学級水準と児童水準の2水準から検討する。

## 2. 研究の目的

(1) 学級の社会的目標構造について、その

構成概念を明らかにする。

(2) 学級の社会的目標構造尺度の信頼性と妥当性の一部を検証する。

(3) 社会的目標構造が学習における動機づけや学校適応に関連する過程を媒介する要因について検討する。

## 3. 研究の方法

(1) 近畿圏内に在住の小学校高学年の指導経験のある教員20名に「児童に身に付けさせたい社会性」について自由記述調査を依頼し、最終的に回答の得られた15名を対象とした。

(2) 近畿圏内の小学5,6年生289名(女児146名,男児143名)を対象に質問紙による調査を行った。質問紙では、学級の目標構造尺度(三木・山内, 2005)、学級風土尺度(伊藤・松井, 2001)の一部の下位尺度を使用した。規律正しさ(6項目)、生徒間の親しさ(7項目)、学級への満足感(5項目)、社会的コンピテンス(桜井, 1992)

(3) 関西圏内の2県に属する3市の小学校23校(117学級)に所属する小学生合計3609名(女児=1756名,男児=1817名,不明=36名)に対して、大規模な質問紙調査を行った。質問紙では、平成25年度に作成した「学級の社会的目標構造尺度(向社会的目標 vs 規範遵守目標)」、「友人との学習活動尺度(岡田, 2008)」、「内発的動機づけ」、「自己効力感(松沼, 2004)」、「関係向上行動(戸ヶ崎・板野, 1997)」、「学級適応(大久保・江村, 2012)」について回答を求めた。

## 4. 研究成果

(1) 自由記述による調査の結果、合計59個の記述が得られ、心理学を専門とする大学教員2名が相談しながらカテゴリに分類した。その結果、向社会的性(36%)および、規範遵守(29%)に関する記述が多かった。得られたカテゴリについて、具体的な記述内容を参考に計28個の尺度項目を作成した。

(2) 学級の社会的目標構造を反映すると考えられる項目群に対して、探索的因子分析を行った結果、2因子が抽出された。第1因子は「向社会的目標構造」と命名し、第2因子には「規範遵守目標構造」と命名した。2因子(計14項目)による全項目の分散説明率は38.62%であり、因子間相関は.61であった(Table 1)。

既存の尺度との相関係数を算出したところ、向社会的目標構造は熟達目標構造と $r = .71$ と比較的強い相関、遂行目標構造とは有意な負の相関を示した( $r = -.31$ )。学級風土の尺度とは、 $r_s = .51 \sim .56$ の正の相関を示した。社会的コンピテンスとは、弱い正の相関 $r = .23$ が確認された。規範遵守目標構造は、熟達目標構造と中程度の関係( $r = .35$ )、遂行目標構造とは独立した関係( $r = -.02$ )であった。学級風土とは $r_s = .29 \sim .43$ の中程度の関連を有していた。

これらの結果から，本研究で作成した社会的目標構造尺度は，一定の妥当性を有するものと考えられる。

Table 1 社会的目標構造尺度の因子分析結果

		F1	F2	$h^2$
3	このクラスでは、相手の気持ちを考えることが大事にされています	.78	-.08	.54
13	このクラスでは、他の人がいやだと思ふことはない、ということが大事にされています	.70	-.03	.46
16	このクラスでは、相手がいやな気持ちになる言葉は使わない、ということが大事にされています	.67	.05	.50
4	先生は、困っている人に声をかけてあげるように、といます	.64	-.10	.34
6	このクラスでは、自分と意見のちがう人とも仲良くすることが大事にされています	.63	-.02	.38
15	先生は、友達を大切にするようにいます	.59	-.05	.31
27	このクラスでは、他の人を思いやることが大事にされています	.57	.21	.52
20	このクラスでは、人を無視したりいやだと思ふことをしたりしないことが大事にされています	.57	.10	.40
17	先生は、授業中はまわりのことを考えずにしようといっています	-.22	.69	.34
28	先生は、ほかのクラスの迷惑になるようなことをしないように、といます	.06	.60	.41
21	先生は、授業中は人の迷わくになることをしないようにいっています	.17	.51	.40
19	このクラスでは、ルールやきまりを守ることができないのは、はずかしいことだとされています	-.07	.51	.23
8	先生は、低学年の子に見られてはずかしいことをしないように、といます	.06	.50	.29
1	このクラスでは、宿題や提出物を出すことが特に大事にされています	.13	.45	.29
因子間相関		.61		

Table 2 既存の尺度との相関係数

	N	向社会的目標	規範遵守目標
学級の目標構造			
熟達目標構造	271	.71 ***	.35 ***
遂行目標構造	273	-.31 ***	-.02
学級風土			
生徒間の親密さ	268	.53 ***	.39 ***
学級満足度	271	.51 ***	.29 ***
規律	271	.56 ***	.43 ***
社会的コンピテンス	235	.23 ***	.09

(3) 社会的目標構造と学習動機づけの関連

学級の社会的目標が児童の学習動機づけに関連するプロセスを検討するためにマルチレベル SEM を行った。友人との学習活動を媒介変数、性別を児童レベル、学年を学級レベルの統制変数として投入した。モデルの適合度は良好であった $[\chi^2(9) = 133.05, p < .001, CFI = .972, RMSEA = .062, SRMR = .055(\text{児童レベル}), .049(\text{学級レベル})]$  (Figure 1)。

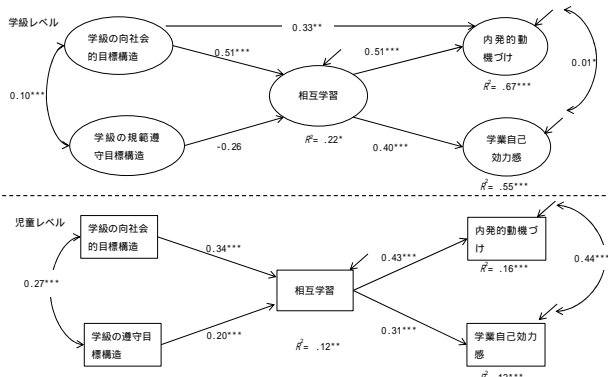


Figure1 学習動機づけへ関連するプロセス

学級レベルにおいて，媒介分析(Sobel の検定)を行ったところ，向社会的目標→友人との学習活動→内発的動機づけの間接効果 ( $B = 0.20, p = .001$ )，向社会的目標→友人との学習活動→学業自己効力感の間接効果が有意であった( $B = 0.26, p = .002$ )。すなわち，向社会的目標が強調される学級ほど，そこに所属する児童は，クラスにいる友人と相互学習を行う傾向にある。そして，学業に対する内発的動機づけと自己効力感も高いことが分かった。なお，児童レベルにおいても，ほぼ同様の結果が得られた。

(4) 社会的目標構造と学級適応の関連

学級の社会的目標が児童の学級適応に関連するプロセスを検討するためにマルチレベル SEM を行った。関係向上行動を媒介変数として投入した。モデルの適合度は良好であった $[\chi^2(7) = 22.16, p < .001, RMSEA = .036, SRMR = .014(\text{児童レベル}), .033(\text{学級レベル}), CFI = .995]$ (Figure 2)

学級レベルにおいて，媒介分析を行ったところ，学級の向社会的目標から学級適応への間接効果が有意であった( $B = 0.74, p < .001$ )。すなわち，向社会的目標が強調される学級ほど，そこに所属する児童は，クラスの仲間に対して関係を向上させる行動を行う傾向にある。そして，学級適応が高いことが分かった。なお，児童レベルにおいても，ほぼ同様の結果が得られた。

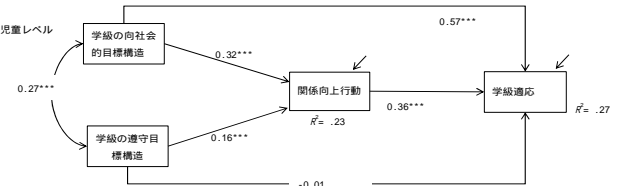
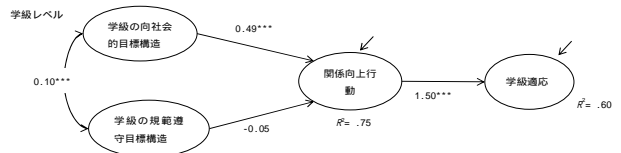


Figure 2 学級適応へ関連するプロセス

< 引用文献 >

Allodi, M. W. The meaning of social climate of learning environments: Some reasons why we do not care enough about it. Learning Environment Research, 13, 2010, 89-104.  
 Ames, C. Classrooms: Goals, Structures, and student motivation. Journal of Educational Psychology, 84, 1992, 261-271.  
 Ames, C., & Archer, J. Achievement goals in the classroom: Students' learning strategies and motivation processes. Journal of Educational Psychology, 80, 1988, 260-267.  
 江村早紀，大久保智生小学校における児童の学級への適応感と学校生活との関連：小

学生用学級適応感尺度の作成と学級別の検討 発達心理学研究, 23, 2012, 241-251  
伊藤亜矢子, 松井仁 学級風土質問紙の作成 教育心理学研究, 2001, 49, 449-457

Fraser, B. J. Classroom environment instruments: Development, validity, and applications. Learning Environments Research, 1, 1998, 7-34.

Fraser, B. J., Aldridge, J. M., Adolphe, F. S. G. A cross-national study of secondary science classroom environments in Australia and Indonesia, Research in Science Education, 40, 2010, 551-571.

三木かおり, 山内弘継, 教室の目標構造の知覚, 個人の達成目標志向, 学習方略の関連性, 心理学研究, 76, 2005, 260-268

Murayama, K., & Elliot, A. J. The joint influence of personal achievement goals and classroom goal structures on achievement-relevant outcomes, Journal of Educational Psychology, 101, 2009, 432-447

松沼光泰 テスト不安, 自己効力感, 自己調整学習及びテストパフォーマンスの関連性 小学校4年生と算数のテストを対象として 教育心理学研究, 52, 2004, 426-436.

桜井茂男 小学校高学年における自己意識の検討 実験社会心理学研究, 32, 1992 85- 94

岡田涼 友人との学習活動における自律的な動機づけの役割に関する研究 教育心理学研究, 56, 2008, 14-22

田中あゆみ, 山内弘継 教室における達成動機, 目標志向, 内発的興味, 学業成績の因果モデルの検討 心理学研究, 71, 2000, 17-324

戸ヶ崎泰子, 板野雄二 母親の養育態度が小学生の社会的スキルと学校適応におよぼす影響: 積極的拒否型の養育態度の観点から 教育心理学研究, 45, 1997, 173-182

## 5. 主な発表論文等

(研究代表者, 研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計 4 件)

岡田涼・大谷和太・梅本貴豊・伊藤崇達、動機づけモニタリング傾向と先延ばしとの関連 動機づけの不安定性の知覚を介するプロセスの検証 香川大学教育学部研究報告, Vol.143, 2015, 55-61.

大谷和太、自尊感情 なぜ失敗を避けるのか 金子書房『児童心理』10月号臨時増刊号、2014、Vol.68、No.15、pp.72-76.

Ohtani, K., Okada, R., Ito, T., & Nakaya, M. A multilevel analysis of classroom goal structures' effects on intrinsic motivation and peer modeling: Teachers' promoting interaction as a classroom level mediator. Psychology,

査読有、Vol. 4、No. 8、2013、629-637、DOI:10.4236/psych.2013.48090

大谷和太・中谷素之、中学生における自己価値の随伴性が動機づけおよび学業達成に及ぼす影響プロセス—中間テストでの達成度を考慮に入れた縦断的検討— パーソナリティ研究、査読有、Vol. 21, No. 3, 2013、254-266

<http://doi.org/10.2132/personality.21.254>

[学会発表](計 8 件)

国際学会

Ohtani, K., Okada, R., & Ito, T., Nakaya, M. Promoting interaction mediates the classroom goal structures' effects on motivation? *American Psychological Association 121<sup>st</sup> Annual Convention*, 2013, Honolulu, p168.

国内学会

大谷和太・岡田涼・中谷素之・伊藤崇達、小学校における学級の社会的目標構造と学習動機づけの関係 友人との学習活動に着目して 日本教育心理学会第 57 回総会、2015 年 8 月(発表予定)、新潟

大谷和太、岡田涼、中谷素之、伊藤崇達(2014). 小学校における学級の社会的目標に関する研究 - 学級の社会的目標構造尺度の開発 - 日本教育心理学会第 56 回総会、2014、神戸

久坂哲也、大谷和太、古本温久、亀岡正睦、ふきだし法を用いてメタ認知をオンラインで捉える試み - 小学校算数科における検討 - 日本教育心理学会第 56 回総会、2014、神戸

大谷和太 大学生における学業上の不正行為とその関連要因 日本教育工学会第 30 回大会、2014、岐阜

久坂哲也、大谷和太、古本温久、亀岡正睦、三宮真智子、ふきだし法と質問紙法で捉えたメタ認知の関係 日本教育工学会第 30 回大会、2014、岐阜

岡田涼、伊藤崇達、梅本貴豊、大谷和太、動機づけを重視することが課題の先延ばしに及ぼす影響 動機づけの不安定性を介するプロセス 日本パーソナリティ心理学会第 22 回大会、2013、千葉

大谷和太、岡田涼、伊藤崇達、中谷素之、学級の目標構造の因子構造 マルチレベル因子分析を用いた検討 パーソナリティ心理学会第 21 回大会、2012、島根

[図書](計 1 件)

大谷和大、北大路書房、階層線形モデル、  
マルチレベル構造方程式モデリング (第 14  
章)、M-plus と R による構造方程式モデリン  
グ入門 (小杉考司・清水裕士 (編))、2014、  
pp.208-227

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

大谷 和大 (OHTANI, Kazuhiro)  
大阪大学・大学院人間科学研究科・助教  
研究者番号：20609680